

独自の主張をするフランス臨床心理学の歩み

滝野 功久 (立命館大学)

私は発表にはコンピュータ使いませんからね。

多分、ほかの方はパワーポイントなどをしっかり用意して、能率よく効率よく発表されるんじゃないかなと思っておりましたが、その通りでしたね。

私は、発表の仕方からしてフランス的にやらないかん(笑)、そういう気持ちでいます。これまでのお二人の発表をここの席から見てみると実によくできてるな、用意されてちゃんとできてるな、と感心しました。

しかし、こういうシンポジウムでは、いろんな人が一緒になって何かやる、討議するということですから、発表自体だけでもそうですが、その一番の楽しみは予定外のことが起きることです。初めから予め決まったことが決まったように展開するのであれば文書や文書を読めばいいわけで... ですから全てがきっちりまとまっていなくともいい。むしろきっちり決定されていない方がいい。すぐにはまとめない方がいい、というように思うのです。また「こころ」が直接関わり、「こころ」が対象であるこの心理臨床は、そもそも非常にまとまりがつきにくいものです。

まとめられない異論・争論の連続

それに加えて、フランス人がやることは、簡単にまとめることはできない。何に関してでもそうですが...フランス人が10人集まると12の政党ができると言われるぐらいで、すぐに論争が生まれ、抗争が続く。なにかひとつにうまくまとめるということに対する警戒がそもそもある、と言っていいのです。

少し前にエリザベス・ルディネスコ (Elisabeth Roudinesco) が『フランスの精神分析史』という膨大なページの本を書きましたが、面白いことに「百

年戦争」というのがサブタイトルなんです。まあそういうところがずっと昔からあります。対立や抗争は当然という風土があるわけです。フランス革命以来というか…

さて、今の小林先生のドイツの話で、ドイツは臨床心理学の発祥の地だと教えられていうことで、「ああ、ドイツ人から見るとそうか！」とびっくり思いました。というのはフランス人は臨床心理の最初はフランスだと思ってるんですね。臨床心理学の基礎にある心理アセスメントを考えればすぐに分かりますが、実用的な知能テストを始めて創ったアルフレッド・ビネ(Alfred Binet)がいます。それから精神療法に関して言えば、今日、実にいろんな方法が開発されていますが、現代の西洋の心理療法の源にはシグモンド・フロイド(Sigmund Freud)の精神分析があることは否めません。そのフロイドはドイツ人だったのではないかと当然みなさんは言われるでしょうが、しかし、フランス人はそのフロイドを育てたのがフランスだと考えるわけです。事実、フロイドは当時最高で最先端の精神医学を誇っていたパリのシャルコー(Jean Martin Charcot)のもとに留学しに来たのです。そればかりではありません。ヒステリーの治療を教えてもらうために治療実践家として高名であったベルネーム(Hyppolyte-Marie Bernheim)のもとにも来ています。

同じ西洋といっても、そう簡単にはまとめられず、それぞれ相当違っていると思いますが、今小林さんのお話を聞いて、隣の国なのにやはり相当違っていることを確認しました。しかし、ドイツとは共通しているなというところが幾つかあることもわかりますね。そのひとつはカール・ユング(Carl Gustav Jung)に対する評価。かなり前ですが、私が最初に行った時のショックのひとつでした。それはユングに対する徹底的な警戒。ユングの本は一応ほとんど仏訳されてはいたのですが、本屋に行くと、オカルト部門に入られているのです。日本の仏教とかチベット密教とかと一緒のオカルト・コーナーに置いてあるんですね。日本に帰って来て、ユングがこんなにも人気があるのは、日本独自であることを改めて痛感したものです。

出自としての医療的臨床の伝統

もうひとつ、心理的援助の対象者を、「クライアント」という言葉じゃなくって「患者」maladeと言うということも一緒ですね。これは臨床心理の専門家が活躍する最大の領域が昔から、医療関係のところであったということからなのでしょう。

確かにフランスでは、臨床心理の専門家は、病院などの医療関係に多い。psychologue「心理士」と言うと、それだけで大抵は臨床心理の専門家と自動的に思われるということもこれと重なっていますが……。

「臨床心理学」の養成課程は、大学の修士課程のレベルで行われますが、大学ごとに学ぶことがもちろん違います。しかし、臨床心理学は、大抵は「臨床心理学及び病理心理学 psychologie clinique et psychopathologie」が基幹の科目として据えられています。そして、このpsychopathologieで精神医学を含んだ症候学・病理学をかなりつつこんで教えられます。私も医学部の教室で、精神科医の講義も多く受けました。そして、これは別の科目名になっていましたが、実際に病院で実際の患者さんに先生が1時間くらいの面談をしてその後学生たちと議論をするという臨床講義が盛んにありました。非常に面白くためにもなりました。この臨床講義というのは、もちろん医学教育の流れにあって始めてできるのですが、シャルコーの臨床講義の様子が大きな絵になって今も掲げられています。臨床心理学の学生は大抵文学系から来ていますが、教育・養成のところでは、精神医学との連携が非常に大きくあるということです。

心理士の資格と精神分析

資格に関しての話をしますと、フランスでは1985年に一応、心理の専門家に関して国家資格の法律ができて名称独占として「psychologue 心理士」なるものが正式に認可されました。今日では4万人以上がその免状をもっている。しかし、これ以外にも実質的に心理臨床の専門家と言える人は、かなりいます。例えば「スクール・カウンセラー」、これは臨床心理士とは違う資格——少しレベルが下と考えられる資格ですが——、これをもっている人が

ほとんどの公立の小中学にはいます。この他にも産業界などさまざまな部門で活躍している人もいて、実際の実数は把握もできていません。まあ臨床心理領域だけでも、4万人はいて、その70%は医療関係と言われています。

ところで病院は、フランスでは基本的には国公立です。もちろん私立の病院もあるんですけども、多くは公立。特に精神科の病院は国公立ですね。ですからここにフルタイムで働く人は公務員ですね。実はフルタイムでの勤務は余り多くはなく、多くの人たちは、あちこちの病院や施設を、掛け持ちでパート・タイマーあるいは産休代理としてや休暇期間中限定などで、働いています。

臨床心理士の資格とは別に、相当の数の心理療法家があります。さらに精神分析家。フランス全土で約5,000人か6,000人いるんですけどね、これは人口比率でいうと、世界最高なんですね。アメリカでは全く事情が違っていますが、フランスでは今も精神分析の勢力は相当なものです。

精神分析というのは、まともな専門家になろうとしたら、訓練に10年ぐらいかかりますから大変な時間を掛けることになります。臨床心理を学ぶ人は、非常に多く、精神分析を個人的に長年受けるようです。それでも精神分析家になるのは、そのうちのホンの一握りというところですが……。

このように精神分析は、よくも悪くもフランスの心理療法の資格にも、いろんな意味でかかわっています。今はそれに加えて、それへの批判勢力として各大学では、認知行動療法の専門家がどんどん入ってきていることも事実です。この前（2007年3月）私が行ったときには、精神分析派と認知行動療法派の戦いが大学レベルで、あちこちで行われているという感じでした。

私が最初にフランスへ行ったのはもうかなり前になるんですが、1972年でしたから、その頃はもう本当に精神分析一色でしたね。行動療法に関してはそのフランス語の呼び方もはっきりとは決まっていないという有様で…そればかりか、カウンセリングなんて言葉でも入っていない。カール・ロジャースも「誰？」という感じ。ほとんど知らないですね。アメリカ精神分析の新しい代表であったエリクソンのアイデンティティ論でさえも「何だ、それは？」という感じでさえあり、アメリカのものはもう一切知らない、知る必

要もない、みたいな感じでした。

アメリカ的適応論への軽蔑と警戒

フランスでは、精神医学と同じく臨床心理学に関しても、独自の歴史を持っています。背後にある哲学や芸術を含ませた独自の発想や考え方を大切にしていますし、アメリカの心理学そのものには警戒感がどうしても出てきてしまうのです。アメリカのあまりにもプラグマティックなやり方やあまりにも実証主義的やり方は、要するに社会適応のための理論にしかならないと見えてしまったり、あまりにもおめでたい楽観主義に見えてしまうのです。

アメリカのやり方が世界において支配的になるということへの警戒感もあります。知的階層では特にその傾向が伝統的に強いのです。こうしたことは反米精神とも言えるのですが、それを代表している選手としては、ジャック・ラカン(Jacques Lacan)を語らざるをえなくなります。まあ後で話しますが、ラカンをめぐってさまざまなことが、精神分析界でも精神医学界でも、さらには思想界でも大きく動きましたが、臨床心理学の領域でももちろんそうです。以前とはもちろんかなり変わってきていますが、それが今もずっと続いているのです。

私はフランスにいたので、みんなからラカン派ですかとか聞かれるんですけど、必ずしもそうではありません。私の先生はディディエ・アンジュー(Didier Anzieu)でして、ラカンの分析を受けましたが、いろいろドラマティックなことがありまして、後には反ラカンになっています。フランスの臨床心理学について語る時、このアンジュー先生を抜きには語れませんので、まずはアンジューから話します。

ディディエ・アンジューと臨床心理学

フランスではロールシャハのコードはアンジューが作ったものを基本として行っていますし、心理劇をフランスに取り入れた最初のひとりでもありますし、無意識の集団力動を研究した最初の人でもあります。さらに実はアンジューという人が臨床心理士の資格をつくるのに非常に大きな努力をしまし

た。成立するまでに大変な時間が掛かってしまったのですが、1985年に国家資格が出来ます。しかし、それ以前に臨床心理学は精神分析と一緒に、その言説は社会的には既にかなり広く認められていて、特にそれが大爆発したのは1968年なんですね。1968年というパリでは五月革命、若者の異議申し立て運動が始まった時です。これはご存知のようにその後、世界中の先進諸国の若者を巻き込んで行く運動に発展する発火点でした。日本だと東大・日大闘争などがあり、全共闘運動の流れができました。それは、それまでの反体制運動と違っていたということが特徴で、経済的な貧困に対する抗議ではなく、既成文化に対するカウンターカルチャーの自己主張といったところがあります……。

その五月革命はパリ第10大学＝ナンテールで勃発したわけですが、集団力動の専門家でもある彼はその激動の渦中であって、この一連の歴史的ドラマの趨勢・展開をエピステモンという名で書いています。

学生たちの異議申し立ての大運動の余波を受けてアンジューは心理学の自立と臨床心理学の心理学の中へ統合に成功。ナンテールに心理学と教育科学の学部を創設でき、それはその後多くできた大学での臨床心理の養成課程のモデルになりました。この時また、アンジューは時の文部省に特命官吏として心理学者の職業的地位を認めさせるための努力をしています。

アンジューの先生というのはダニエル・ラガッシュ (Daniel Lagache) という人で、これが最初に臨床心理学をパリ大学で教えた人で、フランスに精神分析が臨床場面に本格的に入る時代を代表する人の一人です。つまりフランスの臨床心理学は最初から大きくフロイド精神分析に彩られていたということです。

この前にも実質的に今日の臨床心理学の研究や実践をしていた人は、先ほどのピネーはもちろん、いろいろな人がいます。フロイドの精神分析の意義を早くから評価してラカンのデビューを支援したアンリ・ワロン (Henri Wallon) なども加えていいでしょう。こうした最初の世代には哲学を修めた医者が多くいるのです。フランスでは、ピネーもワロンもラガッシュもそうでした。ラカンなどはさらに多くの芸術家との付き合いのなかで、自らの

思想をはぐくんでいきます。医学とのつながりがあるといっても、同時に哲学や思想的な土壌の上に育ってきたと言えるわけです。

実証主義信仰への警戒 標準化・一斉画一化に対する批判

そういう人たちの基本的なスタンスがなにかと言えば、実証主義的科学モデルへの単純な信仰に対する警戒ですね。今日では、その傾向は日本でも強くなり、今や何でもデジタル化して標準化しようとする傾向がある。標準化して、尺度を決めて、点数化すれば何でもできるような、アカウントビリティになり、説明責任が達成されるという考え方。フランス人はそういうのが一番嫌なんですね。

例えば、アメリカ精神医学会の定めたDSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders；精神障害の診断と統計の手引き)。日本でも今ではこれが常識になりつつありますが、心理の世界でも臨床心理の資格試験を受けるとすれば、医者じゃなくとも多少はDSMについて知っておかなくてはなりません。医者がそれを使いますから。

フランス人は、精神科医は別ですが、心理士はまだ全然無知と言っているでしょう。これとこれがいくつあるから、こういう症候群にしましょう。中味の構造や連関を捉えなくて、簡単に誰でもカウントすれば同じ結論にすることができるという考え方に対して、もう徹底的な軽蔑と言ったらなんですが、こんなことで人間がわかるのか、そういう感じがある。これはラカンはもちろんそうですけど、私の師匠のアンジュも、反ラカンの人でしたが、その点では完全に一致して、アメリカ的なやり方は嫌いでした。

これらに関しては、ちょっともときちっと話しをしたいのですが、以前に書いたフランスの心理臨床の実情に関して書いた一文を配りましたので、詳しくはそれを後で読んでください。

日本ではどこへ行っても、レジメと言って、フランス語で要約という意味ですが、大抵は実に詳細にわたるものを事前に配りますね……。しかし、本家のフランスではこのレジメなるものを配ることはほとんどないですね。そ

れより私の話をよく聞いてください、と。

日本で子供を学校に入らせたりすると、何かと説明会がある。遠足でも事前に完全に準備されたものをみんな配って、それを読み上げるというやり方。先生が話してある時、会場で一齐にパラッとページがめくられる音がするんですね。渡したものをみんなで読んでいますからです。こういう光景に最初に出くわすフランス人は多く「何だ、これは！」とびっくり仰天するんですよ。彼らにはなにか全体主義的な臭いをかぎつけるようです。「こんなばかばかしいことをよくやってくれるな！」と言うんですよ。読むんなら家で読めばいい。わざわざこうしてみんなで集まる必要がない、と思うわけです。ここに集まるのは、質疑応答のために、議論するためにいるというわけです。

話は逸れましたが、しかし、こういった〈ここで今あること〉に関連して、具体的にフランス的なあり方の一部を分かってもらうことが大切だと思っ
ているもので……。

ラカンと分析家の養成問題あるいは永続革命

さてもう一度ラカンにもどりましょう。ラカンが提起した問題のひとつは、分析家の養成に関することで、これは教育全般に関わることですし、資格に直結することです。何をもちて専門家と認定できるか？ だれがそれを認定できるのか？ といって根本に関わることを、逃げずに問題提起したということ
です。

ラカン派の精神分析がフランスで圧倒的に人気がある要因のひとつには、それを専門領域の学歴と重ねて考えなかったということがあります。そもそもラカンは精神分析は医学ではないと、はっきり言っていますし、臨床心理学には初めから相当批判的です。医学はもちろんですが、精神医学とか、あるいは既成の科学とかそういうものから解放されてしまってるというか、哲学的な根本を問題にする、そういうことなんですね。精神分析とは、医学的
症状をなくし病気を治すとかいうのではなく、むしろ主体の欲望と不安を、その根底のところから絶えず問い直しながら、虚偽性を暴くことを恐れず自らの生き様について考え抜く特別な手続きというか、プロセスと考えるので

す。

ですから医学で心理学もやっていなくても、精神分析に入門することに何ら問題もないと。事実、ラカン派の分析家には、元経済学者がいたり、音楽家がいたりする。もっとも実際には相当な知性、思索力がないと、ラカン派の文献だけに関してだけでもとても理解できず、全くついて行けません……。

確かに困るんです。そうすると精神分析家というのは、何をもってそういえるか、認定されるかということが必ず問題になって来ますので。それに関しての激論がおこり、それには権力闘争がついてまわる、ということになりますから…しかし、これは実はどこにでもあり避けられない「評価」に関わる問題ですね。本気で考えたら、核に触れてくる大きな問題ですね。容易に解決できる問題ではないことは確かです。何ををもって資格とするかという、それを絶えず永遠に考えて行くということですね、永続革命みたいなもんですね、丸山真男が言った永久革命としての民主主義みたいな…ここでもうお終い、ということだけはあり得ない、だからそういう風に切ってしまうことは許されないと考える。ですから絶えず分裂して行く。

ラカンは簡単に形式を整えるのではなく、それを考え続け、試行錯誤して行くべき、と思っていたのではないかと思います。だからこそ、ラカンは、自身が創設したグループを制度化されすぎて来ていると思えば、自ら解散してしまう。自分が精神分析家となるには、組織に頼るのではなく、結局は自分で考えやりなさいと。自分がどう思えるかがどうかがやっぱり重要なんであって、解散による混乱は、なにも否定的に考えるべきことではないと、だから、今もそれが続いているわけです。

「心理療法士」の認定という課題

さて、これまでのことはこれくらいにして、最近のもっとも新しい動きをお話しておきましょう。一番重要な問題というのは2005年にできた「心理療法家」の認定制ということです。臨床心理士などは、精神科医と同じく、国家資格ですが、精神分析家はそういうものと全く関係なし。また、精神分析

家でなくとも、精神療法士という名称はいくらでも自称でき、それで多く開業している人も相当な数いて、——個人主義的なフランスでは個人開業は相当ありますし——しかし、なかには古い師もベテラン師もいる。そうでなくとも訴訟沙汰を抱える人もいます。もう、あっちこっち問題がでてきて、どうにかしなくてはという状態になってきた。実際心理療法やったらおかしくなってしまった。発狂するとか自殺未遂とかさえあって、実にいろんなことがあったりして、これはいかんというので、ちゃんとした制度をつくるべきという動きがうまれて、心理療法士認定制度が生まれたわけです。ところが、具体的にじゃあ誰がどのような形で認定するのか？今やってる人に、例えば偉い分析家に対しては、誰がどういうふうの実績を評価するのか？ある一定の期間勉強していただくとしても、なにをどこで？などなどの問題が一挙に出てきて、さまざまな学派の思惑が衝突・紛糾し、具体化はストップしたままになっているということです。最初に言ったように、簡単にはまとまらないということだけは確認できた、ということです。

精神の自由の死守、カルト告発

それから最後に、しかし、一致団結してまとまることもあることを示すためにも、ひとつの面白い例を出しておきましょう。フランス人の精神とか文化にも直接関連することです。

それは、ちょうど同じ頃にフランスの国会が特別調査委員会から出された「カルト集団に関する報告書」が全会一致で承認したということです。それは実に詳細にわたって、どういうカルト集団なのか……それがどういうことをやったのか、どういう危険性があったのかということで、こと細かく実名を出して報告しています。日本が発祥の団体も、日本では非常に有名で確たる地位を、もっている団体なども含めて、いくつか実名が出されてしまって告発されているのです。

これは私も見て、びっくりしたというか、ちょっと感動もしましたが、これは何を意味してるかということ、個人の精神の自由を侵害するような団体・組織は絶対に許さないということなのです。つまり各自の相違・差異がゆえ

に対立するのは当然で、それをなくするために何かに操作されるのは許さない。カルトでは予定調和的であれ、破滅的であれ、コトは全て予め決められていて、異論が全くゆるされません。また所属しているカルトの外に出ることもかなわないようにする。これは精神の隷属以外のなにものでもないわけです。そういうことには国を挙げて断固反対する。精神の自由は、どんなことがあっても死守するという。これがまあフランス人の自由の思想であり、個人の人権意識であるのです。

そこが最初から言っているように、コトを統一し、標準化しようとすることへの警戒感と繋がるのです。こころのあり方を標準化する、特に苦悩を標準化するとは一体なんだ！！ということです。こうことに対する根本的な警戒がすぐ出てくる土壌であるわけです。そのあたりがフランスの臨床心理学の底にあるものかなと思います。

人との違いをあまりはっきりさせないようにして、何よりも調和が大切にされる日本の精神風土とは、フランスはあまりにも違って、困ってしまうと思う人もいるようですが…しかし、そのようにひどく違って文化のなかで動いているところを、しっかりと見るということは、臨床心理学自体を観る時には、非常に重要な意味があると思います。

サトウ ありがとうございます。質問ありますでしょうか。無いようですので、4番目の登壇者、松見先生お願いします。指定討論とアメリカの状況をお話しいただきたいと思います。